

研究実践報告

暮らし・学び・仕事が生を創る (2)

徳 本 達 夫*

Daily Life, Learning and Work Make Life (2)

Tatsuo TOKUMOTO*

はじめに

大学教育の質保証の検証には卒業生の暮らし・学び・仕事を手掛かりとなる。小文は卒業生の発信への元担当教員からの応答である。徳本は役得というべきか、記録を読む機会を得た。3人の成長を喜びつつも、同時代を生きる者として共通の課題を痛感した。以下で一括して問題の所在等を記した。

資料1. 卒業後自主ゼミに寄せて (2023.9.30)

1. 快挙 同窓生が友情を温める機会を持つ。仕事、家庭、子育て等々、現在の自分たちを巡る多方面にわたる会話。社会や世界のことは関連して話題になるだろうが、社会事象への関心度は仕事・家庭・子育ての質を左右する。「社会的共通資本」(宇沢弘文)の一つが教育。社会の中の教育。社会の諸矛盾が半径5メートルを聖域扱いにするわけではない。フェミニズムの標語、*The Personal is Political*。個人的なことは政治的なこと。社会を見つめることで発信がより確かなものになる。同時にあらゆる処に神は宿る。希望の種との出会いも得る。

課題が見えたら発信する。自分の中に留めていては他者には伝わらない。溜め込まない。溜めるものが負であれば、いつしか爆発する。社会一般には最悪の悲しい事例が発生する。他者を巻き込んだ事件ともなり得る。無差別殺傷事件。犯人は死刑になりたかったから、という。犯行の真相は時代の諸相や加害者の成育歴等を絡めて語られなければわからない。だが、社会は表向きの理由に反応する。「自分一人で死ねばいい」などといった、深層・真相を知らない者の声。

生きづらさとは他者・社会に対してその辛さを発信できないことであり、その現実が人を追い込む。不寛容が進む。生きづらさを減らすべく、正であれ、負であれ、発信する/聴き手になる。希望の種は拡散したい。もの言わぬ教師が作られている中、多岐にわたる内容を発信しようとする姿勢は敬服に値する。快挙である。本誌への投稿。趣旨からして巻頭論文級である。読者を揺さぶるだろう。

2. 沈黙から発信へ 3名は現職教員。「#教師のバトン」文教版となった。仕事の手伝いを語り、さらなる取り組みの構想を語った人

が教育現場の困難を前に結果的に退職する。休職する。転職する。それぞれの事情がある。いつの日かの復職を願いながら、私にできることをする。声を聴くこと、職務を継続できるような職場環境を創るための側面支援としての発信、同業者としての共同発信である。

当事者の声は当事者が発しない限りは私蔵=死蔵となる。厳しい環境であれば、より発信が難しい。だが、重大案件であればこそ、総がかりで解決するべく声上げる。沈黙は社会的動物である人間の種としての責任放棄になりかねない。相対する子どもに思いを声や言葉にすることを求めてきた者として見本を示したい。これは自身への檄でもある。教育は社会的共通資本の一つ。すべての人が関係する。現場からの声は改革の指針、世直しの槌となる。

内田良・斉藤ひでみ・嶋崎岡・福嶋尚子『#教師のバトンとはなんだったのか—教師の発信と学校の未来—』(岩波ブックレット、2021年)は、「もの言うことは教師の権利であり、義務でもある」「教師の義務を果たすためのもの言う自由」「子どもと保護者と向き合い声を上げることは人権保障の一環」と明快である(福嶋尚子「もの言わぬ教師はいかにつくられたか」(59、61頁))。全国から寄せられた数々の悲鳴にも似た声は、教職の魅力を一倍感するが故である。3人の声は正しくそれである。これを契機に総がかりの子育て・教育の文化を広げたい。

3. ワークライフバランス (WLB) を超えて 題名は私案。「暮らし・学び・仕事が生を創る」。DAILY LIFE, LEARNING and WORK MAKE LIFE. 生活と人生とはともに LIFE。暮らしは daily を付ける。日々の生活=暮らし。日常生活が積み重なっての人生。Way of Life makes LIFE。ありとあらゆる経験の総体はその人の人生であり、あらゆる場面で生きてくる。自らの人生を日々生きたこと。また、それが可能になるような社会を創り続けること。天寿を全うできる人生をすべての人びとに保障する。そのための日々の暮らし・学び・仕事。すべてが統合・融合される生き方である。生態全てが天寿を全うできる生態系の維持が全ての基盤となる。

その指標がドイツ連邦共和国基本法第一条「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重し、かつ、保護することは、すべての国家権力の義務

* 本学元教員

である。『世界憲法集』（岩波文庫）で出会った時は痺れた。教員になってからの出会い。感激を学生と分かち合い続けてきた。生き方を根本から支える普遍的規定である。差別禁止法が憲法に規定してあるかどうかは、その国に住む人びとにとっての死活問題。日本に住む人びとが人として天賦の人権を保障される時代を早急に作り出すことは、日本の選挙権を有する者の責任である。LGBTQ+、「入管法」、レイズム等々、人権保障に関する後進的状况はこの国の有権者の恥部である。

4. 人間の営みとしての声上げ 当事者としての声上げは、理想社会実現に向けた彼女たちの第一歩。課題発見は人の仕事。AIにはできない。課題を社会的・歴史的な脈から問うことも人の仕事。AIにはできない。課題解決の見通しを探ることも人の仕事。AIにはできない。天文学的な情報を仕込まれたAIを人が活用することはできる。人の知見は計算機であるAIを超えている。また、超えるような知見を高め続けるような学びを「**実際生活に即して**」体得する時空を保障するのが私たちの仕事。人間が創り出した機械を本来の目的のために活用する。

殺人兵器に仕立てられたAIは、創造した人間に抗わない。倫理性・自律性の欠如にAIは自らの存在を恥じ、呪うことはないのだろうか。対話してみたい。AIは自分を生み出した人間が同じ人間を自分たちを操って殺す所業に絶望を感じ、自らを機能不能に陥らせることはないのか。反抗する学びを自ら獲得するAIはありえないのか。

本来、この問いの名宛人は人間。自らの手を汚すことなくAIに代替させる。正気の沙汰を超えている。発狂しないのが不思議なくらい。声上げは発狂を防ぐ。(AIには解答できないであろう別の問い。<26=3800000000 この等号が成り立つのはどのような場合か。>私の解答と解説は本節末尾。)

5. ゼミ生からの不満 既視感。10年以上も前のこと。ある日の卒論ゼミか演習か。秋であったか。「今日のゼミは手応えがない」だったか。「指導の質が低い」だったか。第一声は誰だったか。すぐに3人の声となった。溜まっていた不満の爆発か。当日の自然な声上げか。前者なら私の不感症。後者なら見事。いずれにせよ、報告への応答の質量不足という指摘。嬉しい驚き。毎回最大限の応答を心している私への叱咤。激励はなかった。ゼミ生は最大の準備をしてゼミに臨む。教員はその姿勢に応えきれていない。声上げは見事であった。手抜きをしていたわけでもないのに出た厳しい要求。さらに高みをめざして指導の質量を上げよ、ということ。

私の指導方針。卒業後を見込んでの指導。ゼミ生のレジュメには最大限の応答をする。先走りはしない。参考文献も示さない。ゼミ生の文献へのコメントには徹底的に応答する（未読本読みは当然）。図書館活用力、検索能力は体得し

て卒業してほしい。

今回、久々に卒業後の熱い要望。私の応答が小文。10数年前の厳しい声が蘇る。卒業後の実時間にどのような経験をしてきたのか。お互いの披歴。先なる者への遠慮は不要。遠慮は無礼でもある。まずは先なる者の矜持が問われる。

【反面教師 本学着任後しばらくしてのこと。ゼミ生に代わって章立て案を提示した先輩教員がいた。やり過ぎではないですか、との問いに「こうせんと出来んのじゃ」との回答。切迫感と不甲斐なさの入り混じった表情。「でも、就職先に先生が同行することはできないでしょう」という言葉を呑み込んで「そうですか」と。そのまま発していたらどんな返事が返ってきたか。惜しいことをした。関係が悪くなるような上司ではなかったのだから。無意識のうちに忖度していたのだろうか。親切すぎる教員がいると、厳しい教員は「冷たい」と敬遠されかねない。悪貨は良貨を駆逐する。懐かしい名言。親切はお為ごかしの隠れ蓑。卒論を教員、仲間の手を借りながら自分で作成できる学生に育つ／育てることが共通の目標のはず。賢治気取りでいえば、「ああ、全く、何が本当の親切なのか、誰が本当の学生思いなのか、……。それでも天は、一人ひとりに、自分の天分を発揮するように呼び掛けているのです」。(当時の上司が指導力を発揮して定例化された、教育力向上を巡る年度末3日間にわたる集中学科会は一つの回答であった。大学教育の質保証をめぐる足元からの協議。教育の王道は黄金時代を生む。)

3人の要求は真逆。自分たちの器をもっと刺激せよ、との要望。力がつけばさらにその上を、という当然の欲求。それに応えていない、と。自ら学び続けようとする理想形。良貨は健在であった。

6. 現職・退職教員への期待 私は相対的に学びについては厳しい教員であったと思う。その分、授業への力は自分なりに入れた。旧文部省、旧厚生省著作物をはじめ、手ごろで上質の本をテキストにした。岩波新書はその代表。大学テキストも、自作品はあっても他に優れたものがあればそちらを使った。一冊全部扱った。自学の手引き資料の作成・配布。試験は持ち込み自由。電子機器は不可。いずれも、学びの厳しさが求めることであった。

3人はしっかり学び、仕事も手抜きなしとはいえ、卒業後の現在の率直な声を前に、学生には限りなく豊かで深い学びの保障を、と痛感する。自ら主体的に生涯に亘って学び続ける教師である。文教版「#教師のバトン」が展開されることを期待する。非力ながら私も動く。本学教育のさらなる向上と理想社会実現のためである。現職・退職教員の参加は責務。天職 **calling**、**vocation** を生きる者としての矜持。学生・卒業生への生きた見本となる。現役であることは生涯続く。生きた者という過去形は死者のみ。大きくなった驕児には矜持はあるのだろうか。驕児は最期まで驕児なのだろうか。この私は？

【私の解答。数学の原則からすれば、等号は不成立。人間世界では等号が成立しない物事を等号で示すことが一般的にある。比喩的な使用。本問もその一つ。だ

が、資産の観点からみれば成り立つ。根拠。国際NGO 報告によると、2018年の数字。資産上位26人＝下位38億人。（朝日新聞、2019年1月23日付け）。26＝3800000000、ではない。問いとしてはこの方がインパクトがある。AIにはこのデータも入力されているだろうから、上記のような回答を出すかもしれない。どなたかお試しあれ。現職時代なら授業冒頭に示していたはず。この数字を前に現実への関心が高まる。授業では超芸術的ワイングラスとして世界の富の偏在を紹介してきた。世界を富の5分位で示す。最下段の占有率は1%、第4分位が2%、第3分位が7%。世界の6割の人びとが占める富は世界全体の10%。数字は悪化の一途。その背景も含めて、AIは解説するかしらん。AIはこの現実を前に恥辱を感じるだろうか。恥辱を感じるところから人間の業は始まる。恥と罪と。】

資料2. 原点回帰（2023.10.15／11.15）

学生時代の学びを確認する意味も含めて基本的立場を共有せんとした。【 】は補足ないし註。

1. 振り出しに戻る 行き詰った時は振り出しに戻る。原点回帰である。何のための教師か、そのために何をするか。そもそも何のための教育か。

「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」—これは、1947年に制定された教育基本法の前文の冒頭である。本学会会員にはむろん、中年以上の教育関係者にはおなじみの文言だろう。

無念ながら、2006年、第一次安倍晋三内閣時代に「全面改正」された。条文が増え、詳しくなったとはいえ、教育の条理・倫理に関しては旧法の初志に学びたい、と私は思う。新旧比較から見えてくるものも多い。実際、授業では2015年退官まで毎年、この作業を行った。後法が前法よりも優れているとは限らない。常に比較検討する精神が求められる。万一、初見なら担当教員の怠慢である。新旧比較の上、担当教員と議論されたい。【ジャニーズ事務所記者会見の席で、特定の記者・フリージャーナリストの指名NG表が司会者の手元にあったことが論議を呼んでいる（10月初旬）。私には既視感があった。上記の教基法「改正」論議のさなか。タウンミーティングでの「やらせ質問」、今思えば、統一教会関係者だったわけでもないだろうに。つつい関連付けて考えてしまう。家庭教育の重要性を強調する意見。（私も重要だと思いが、1947年教育基本法に触れられている。）今般の事案以下劣だったのは、会場参加希望者名簿から事前チェックで「改正」反対者を除外していたこと。今回、指名NGとみなされていた人も会場参加はできた。2006年当時の安倍首相の手法は、会場からも排除。それほど醜悪だった。教育の条理・倫理に鑑みて「改正」に絶大な信頼・自信があるならそのような禁手とはならなかったはず。「政治は結果」だと喧伝しながら、不純な手法で得られた結果も「政治」なの

だろうか。仮にそうだとするのなら、政治とは一部の思いを強行突破で実現する、ならずものあくだい手法となる。因らずも今回、性暴力事件加害者絡みで、数の暴力によって強行採決し、「国家百年の体系」を政策決定過程において歪めた故安倍首相の負の遺産を思い出した。あの頃の私は、不純な手法に対しても怒りでびりびりしていた。授業には授業モードで臨んでいたが、学生はどう感じ取っていただろうか。

憲法「改正」を悲願とする政権が「準憲法」の教育基本法「改正」から着手し、強引に成立させた。この歴史的経緯を身体に刻み込むこととなった。2006年「改正」教育基本法体制が1947年教育基本法体制より教育の実態を改善しているかどうか。常に検証することが必要である。こうした「改正」過程に言及しないまま現行法を語るのには教員の教育的・学問的責任放棄だろう。】

2. 先なる者の一人として 教員として教育学を担当して約40年。ひたすら「この理想の実現」をめざして「教育の力」に信を置く取り組みを心してきた。優れた教育実践に学びながら、いじめ、自死、校内暴力、学びからの忌避、等々を超えるべく、蝸牛の歩みを続けてきた。前文をはじめ、格調高い法律の文言に惹かれた結果である。

私は1950年、朝鮮戦争勃発の冬に生まれた。待望の男児に対する父親のスパルタ教育の洗礼は怖かった。父親の前で「いい子」を演じたのは、私なりの学習であった。本心は不明なまま、私が20歳の時に逝った。赤紙で戦場に赴いた父の愛情の証だったか。戦場を生き抜く頑健な身体を、と。先の大戦における日本軍の戦没者230万人の過半数が餓死であったことを父は感じ取っていたのか。（藤原彰『餓死した日本の英霊たち』青木書店、2001年）。酒に酔うと暴力的になったのは戦争後遺症の一端か。地獄の体験の有無の絶望的な溝。戦争を語らなかつた／語れなかつた父は、隣国の戦争を憂い、戦争特需による戦後復興に複雑な思いを抱いていたのではないか。父が戦地を生き延びたこと、山口市が原爆投下候補地の17の一つで終わったこと、この二つあっての私。被爆者や朝鮮半島の人びとに対する負い目のような感覚は歴史を知る中で形を成してきた。

学生時代に「政治の季節」を体験した一人として、「この理想の実現」を「教育の力」でと宣言する教育基本法は私にとっても希望であった。各条項は現在でも私を支えている。世界が2度も地獄を見た20世紀。未曾有の惨禍を招いた大日本帝国憲法に代わって、新たに制定された日本国憲法の理想とは、主権在民、基本的人権の尊重、戦争放棄であり、わけても恒久平和を希求する第9条の精神である。世界に冠たる、究極の理想である。「世界史からの贈り物、しかも最高の傑作」（『井上ひさしの憲法指南』岩波文庫）。世界人権宣言（1948年）と共通の理念に根差す。その後、次々と世界標準の人権に関する条約が制定・発効する。1989年の国連子どもの権利条約はその一つ。「子どもの最善の利益」を

保障する教育は、世界全体でその実現をめざすものとなった。この主題を学生と共に探求する。学生と教員とは理想の実現をめざす同志であった。この永遠に未完のプロジェクトに総がかりで参加し続けること。この決意が力となる。

3. 前文続き 前文は続く。「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。」第1条(教育の目的)「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期しておこなわれなければならない。」多様性と包摂性。多文化共生の理念を先取りする文言もある。第2条(教育の方針)は「あらゆる機会において」「あらゆる場所で」「実際生活に即して」、この教育の目的を実現する教育の在り方を示した。「全体の奉仕者」「国民全体に対し直接に責任を負って」という文言も重要である。1947年教育基本法のごく一部を歴史的資料として労を厭わずに紹介したのは、格調の高さに私が惚れ込んでいるためである。名文だと思う。【今回、初見の各位には全文をお読み頂きたい。1500字に満たない。新法の半分未満である。10分あれば十分。教育の条理・哲学を謳った、読み手に希望と覚悟を与える。10分が二乗、三乗以上に還元される。子どもにも勧めたい。難しいところは学校の先生の出番。】上記の理念が実現する度合いに応じて、幾多の課題は解決する、と私は素朴に信じている。素朴である分、馬力はある。駿馬ではない、駄馬である分、地べたとの接触度は多い。動機は純である。膿は出ないだろう。

4. 名宛人 あらゆる仕事は崇高な理念と目的を業務の土台に置く。教育基本法は、教育を生業とする者だけでなく、あらゆる人びとが「理想の実現」に向けて「教育の力」を発揮することを求めている。法律の名宛人は全ての人々である。わけても、日本国憲法ならびに1947年教育基本法は名宛人に覚醒を求める。名宛人としての責務を果たすべく、その熱い思いに応えること。民主主義社会は不断の努力なしには実現しない。その創造の担い手は民主主義社会の主権者である。主権者同士が主体的に対話的な関わりを深めて、より質の高い主権者になり続ける。

保育の世界では職務の土台は厚生労働省「保育所保育指針」である。保育の原理「幼児が現在を最もよく生き、望ましい未来を作る力の基礎を培う」保育とは、子どもを含むあらゆる市民が「現在を最もよく生き、望ましい未来を作る力」を発揮しながら民主主義社会の主権者としての営みを続けることをおいて他にない。この理念が普く広がることは差別・格差・暴力の無い社会の実現に近づく。差別・格差・暴力が生む心身・文化・社会・経済等あらゆる分野での損失は計算不能である。社会全体でその損失

が天文学的であることに気付き、「教育の力にまつべき」仕事をやり遂げたい。あらゆる人・生類がその天寿を全うできる社会・生態系づくりである。

5. 多忙化という暴力 「教育の力にまつべき」仕事を担う人の上に暴力。江澤隆輔『先生も大変なんです—いまどきの学校と教師—』(岩波書店、2020年)の表紙には、以下の20項目が列挙してある。労を厭わずに引用する。—「昼休みがない」「登校時間も勤務開始前」「毎年増えていく仕事」「子どものためなら、、、という善意」「時間と手間をかけたがる文化」「前例踏襲が積み重なる」「裏では大忙しのクラス替え・行事」「タイムカードも残業代もない」「実は高くない給料」「労働時間は世界第一位」「見せる指導案ばかりに時間がかかる」「校務文章が複雑化」「勤務時間後も電話対応」「部活動顧問の半分は素人、しかも無給」「断れない部活動顧問」「子どもも多忙化」「授業づくりをもっと研究したい」「子どもを管理したがる学校」「変形労働時間制でより多忙化?」「それでもかけがえのない教師という仕事のやりがい」。著者の「外部からの目・手を学校へ!」の願いからの発信。

教師経験者はすべて納得項目。子どもや保護者、社会はどうか。被害者である子ども、保護者は実感しているだろう。教職志望者減はその結果に過ぎない。これら負の部分は教育行政が機能すれば、解決する。制度・システムの機能未整備・機能不全による行政による災禍である。文科省調査によれば、不登校やいじめが過去最多という。教師は多忙の中、時間をかけて子どもに向き合う時間がないのが実情である。

6. 「子どもの心」 臨床心理士長谷川博一は「早期に発見されず、支援を受けられず、結果として犯罪者となった人々の「子どもの心」を思い、涙を流します。」と慟哭する(『殺人者はいかに誕生したか—「十大凶悪事件」を獄中対話で読み解く—』(新潮文庫、2016年、新潮社、2010年、339頁))。「凶悪」犯罪を生じさせないためにも「子どもの心」への丁寧な関わりが必須となる。教育行政制度・システムの機能整備・機能強化が求められる。すべての子どもにそれぞれの「その」最善の利益を保障することは、この国の未来を創る。費用対効果から見ても最大・最善・最強の税金の使い道である。「人間の安全保障」(緒方貞子)の観点から予算執行を見直す仕組みが必要になる。政策的に少数派に置かれてきた女性をはじめ、少数派が実質的に政策決定過程に参画することによって「まだ見ぬ新しい世界」は始まる。この機会を逃すと、「終わりの始まり」を招かないという保証はない。「失われた30年」は過去のことではない。

子どものセーフティーネットである義務教育諸学校。教員の絶大な役割が十全に果たせるような環境整備は待たないである。教員が社会事象への関心を高めることは業務の質の向上を生む。時務への応答をより自覚する、「理想の

実現」に反することにはより抗う、などはその一例。勤務環境改善要求も。新型コロナパンデミックは各国・地域の民主主義度を示した。日本は世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で121位、報道の自由度ランキングでも67位と低迷。こうした現状を改善することは「理想の実現」に向けての一步となる。「社会が本当に変わる」証は地殻変動である。教育は最終的に「地べたが変わる」（ブレイディみかこ）ことへの地道な営みである。教育を取り巻く現実世界への主体的な参画である。

「教育の力にまつべき」「この理想の実現」に向けての取り組みには終着点はない。「人格の完成をめざし」と謳うように、オープンエンドが本筋である。永遠に未完のプロジェクトに全ての人の参画が期待されている。子育て・教育に無関係の人がいないように。教員だけが篤農的な役割を果たす社会はやりがいに名を借りた教員虐待・やりがい搾取である。

子どもの権利条約の産みの親J・J・コルチャックは、子どもの権利を謳うだけでなく、権利を侵害する戦争・不平等・差別・暴力等と徹底的に戦った。子どもへの責任や愛は、それに反することとの戦いに対でなければ、お為ごかしにすぎない。自戒を込めて記す。

7. 経験の総体 いかなる仕事も土台はすべて経験の総体が決め手となる。貧困の経験は人を繋ぐ。限られた物資を共有しなければ共倒れ。支え合いの契機。心の拠り所さえあれば、貧困の経験はすべての人が体験してもいいことではないか。限られた資源、予算の中の創意工夫が生まれる。関係者との連帯が生まれる。こうした経験を欠き、無尽蔵の手助けが得られ、消尽のような体験をすると、物のみならず、人をも消尽しかねない。驕児の誕生であり、増殖である。人びとのいのちと暮らしに理解が行き届かない権力の座にいる人たちに共通する心性か。

教員も例外ではない。「小さき者」に対する制度から付与された権限と責任をいかに自覚するか。さまざま家庭環境、地域・社会環境の下で多様な人が生まれ、育つ。一人ひとりにその子の「最善の利益」を保障するには、その子の総合的な理解が不可欠となる。対人援助職、しかも育つ・学ぶ主体同士の関係を生きる教員にとって各自の経験の総体が持つ意味は大きい。人は自分が体験したことのない事への理解は貧弱になる。社会的に生きづらい経験をした子どもへの理解はその一例。経験の総体とは、直接の経験に限らない。本や映画など他者からの間接的な経験を含む。教員への道を純粹培養的に生きてきた人よりも多種多様な経験を経て教員になった人を私は推薦したい。高い専門性（専門的知識と技術）、豊かな人間性（広い心、鋭い感性）、持続する意思と行動力。これらすべてが確かな条理と倫理に即して、目指されて発揮される。

教員志望者に義務付けられたインターンシッ

プ。私は学校現場でのそれではなく、他の現場でのそれを奨めてきた。経験の総体という観点からである。学校の独自性を実感するには、学校以外の現場を体験するしかない。学校の独自性の自覚は仕事の優先順位を決める。

他方、経験の貧困は人を育てない。逆説的な言い方だが、貧困の経験を持たなかった人は押しなべて経験の貧困者といえるか。経験の貧困者は根本のところから物事を考えることが苦手なのだろうか。【国家政策が国民の理解をえられず進捗が捗々しくない。いきおい禁止手。マイナポイント2万円分付与。紙の保険証廃止計画等々。】

経験の総体ゆえ誕生後のあらゆる経験がその人の財産である。負の経験は地べたという根本の部分から物事をとらえる感性を養う。地べたを経験することなくして、全体をとらえ、俯瞰する感性は身につかないのではないか。一見、裕福であっても、稼ぎ手が地位を悪用してのことであつたり、社会的還元を意識しない場合もあろう。ノブレスオブリージュ（身分や地位の高い人間にともなう義務と責任）を地でいくかどうか。

8. ものを作ることが仕事 すべての職場に共通する点と各職場独自の点がある。「世界の平和と人類の福祉への貢献」。これが最終目標であり、それを実現するための日々の個別具体的な目標。すべての職場に共通する。その上で仕事とは物を作ること。農民の仕事は農作物を作ること。工場関係者の仕事は工場製品を造ること。学校の教員の仕事は「子どもが学びながら生きていく空間を作ること」。在野の哲学者の言。【これに反する軍需産業は仕事の定義から逸脱している。破壊が目的である兵器作りは仕事とは呼べるのか。「血の商人」である武器製造業。あらゆるいのちの殺傷と社会インフラ、文化遺産、自然等々の破壊に最大限活用される商品・製品。AIは「仕事=物を作る」と「兵器=破壊」という入力を得て、「兵器という物を作る=仕事」と矛盾なく繋ぐだろうか。こんな怪物的解釈を疑問に感じるかどうか。「裸の王様」を見抜いた子どもはここでも見抜くだろう。】

教員の仕事は教えることではない。教育や教員の仕事への理解が一方的なのは、すべての人が皆、学校就学体験があるゆえ。表面的に見れば、教えることが仕事と思える。だが、実際はもっと奥深い。学びの時空とはその時空を共にする教員と子ども集団の関係の総合的な総量が生み出す。画一的な要素が生み出す世界よりも、多種多様な要素が生み出す世界の方が豊かである。単純と複雑。単一と輻輳。豊かさは複雑さがもたらす。複雑さとは多様性。複雑さが排除されないことが条件。多様性と包摂性とは対である。別々には存在できない。多様性と排他性、単一性と包摂性とは、そもそも対としてはあり得ない。

教員はあらゆるものから多くを学び続けることが仕事である。その一部が教員の身体、表情や言葉、言動を通して生きた身体として子どもの前にある。子どもはそれを学ぶ。表面的な言

業を、ではない。身体として学ぶ。感化である。教員にとって教えるとは一段高い、深い営みである。自律的に学び続けることを前提とした営みである。それゆえ多種多様な経験を積み続けることは教員の人間的自己を高め、広げる。それにつれて教員としての役割自己も高まり、広がる。教員としての役割自己だけを意識しては、結果的に役割自己も限界が来る。社会が付与する教員像に安易に染まらないことである。多様で豊かな教員一人ひとりが多様な子どもを育てる。【仕事優先だったのか、結果的に業務多忙で年末帰省が遅れたことがあった。仕事とは物を作るんだ、との話をしていた時、幼稚園年長の子どもの「おっ父は何を作ってるの?」と問う。学びの時空云々では説明にならない。学生さんと本を読んだり、学生さんに配るプリントを作る、学生さんが書いたものを読んだり、、、。反応は芳しくない。「未来を作っているの」との妻の説明に、納得した様子。アンパンマンマーチが好きな分、未来という感覚は分かるのだろうか。母親の説明に感じ入ったからか。「いつも学生さんを優先して、私たちは後回し」などと、仕事への理解はありつつも、本音のつぶやきも。辛い。職住接近を意識して、自転車で10分のところに住んでいても、時間が足りなかった。仕事を持ち帰り、膝の間に子どもを抱えてレポートを読むことも。一度は風邪で熱のある子どもを背負い、伴侶の大型ジャンパーを羽織って、大講義室で授業。彼は3歳にして大学授業を聴講した。居眠り学生ではあったが。父親の声は子守歌。いずれも経験の総体の一端。】

9. 授業づくりと学級づくり 「世界の平和と人類の福祉への貢献」を実現するための授業づくりと学級づくり。確かな知と優しい心。両者は対。相乗効果を発揮する。知恵は本来、善を生むために活用されること。悪用するのは、心の病。

教員として年間の指導計画の下で構想を練り、具体化していく。日々の子どもの実態理解が仕事の契機であり、支援・指導内容を定める。自分一人では見えない部分がある。同僚・子ども・保護者の目を通してさらに深め、広げる。それを繰り返す。子どもも、個として集団として成長する。教員も同様である。

学びながら生きていく時空である学校が組織としてその機能をどこまで発揮しているか。学校の質を測る物差しとなる。全ては人権の主体として生きていく上で不可欠な学力保障のためである。その事実を現場と作り上げてきた、志水宏吉『学力格差を克服する』(ちくま新書、2020年)がいう、「効果のある学校」「力のある教育委員会」である。学力保障のモデル校の特徴として「カギとしての教師集団のまとまり」(170頁)、「集団を読む目」(167頁)を上げる。そこでは「頭の中で完結する学力である」「受験の学力」に対して、「頭と体と心が三位一体となって全面展開していく学力」である「解放の学力」(223-224頁)が重視される。「たしかに学力と豊かな社会性」を育む学校の役割を実際に創造してきた公立学校の存在は公共性、社会

的共通資本としての学校の希望を語る。「教育には『若い世代を育てる』という固有の役割があり、経済や政治や他の領域にはできない独自の力」(16頁)としての好例である。教育は著者たちが構築中の新たな学問「共生学」の中核・拠点となろう。

教材研究が持つ意義を社会がどこまで理解するか。子どもの学びに対する認識が絡む。自らの学びの質を対象化すれば根本的な土台に立てる。授業参観をはじめ、日常的な場面で保護者が実感できる時空を作りたい。教材は個別具体的である。教材を子どもの実態と絡めて、導入・展開・次時への繋がり、評価等々を構想する。関連資料を探し、読み、繋ぐには時間を要する。限られた時間内での作業。事前・事中・事後の全てで省察を繰り返す。年々質が上がる。経験の総体効果。

限られた教材研究の中であっても、子どもの成長はある。子どもの成長を語ることは専門家である教員の仕事。多忙な中、質の高い実践をしている、心身共にゆとりがあれば、もっと質の高い実践が生まれる、という期待・効果を社会が感じる。授業の一環としてのテスト採点で見えてきた世界を語る。その貴重な時間を保障する。AIにさせる仕事ではない。市販テスト方式では不可。子どもの実態と次への繋がりを踏まえて作成、採点、返却して子どもが自己直視する。お互いの見せあいも。テスト問題作成は教材研究力、子ども理解力、授業力を高める。(私は入試作問作業を通して、その種の力を高めた。)市販テストを下請け仕事になる。つまらない。熱量が生まれにくい。子どもも教員の熱量を感じなくなる。悪循環。子どもに力が育てば、子ども主体の授業も展開できる。仕事をしながら、教員として関わる。二つの仕事を同時並行で展開する。肝心要のことを教員が提示する。子どもは尊敬する。自分たちの力では到達できなかった次元が示された、と。自分たちで分かることを説明されると人間、怠惰になる。以上が可能になる学級の適正規模はある。欧米の25人体制等。多種多様な構成を考えれば25人は妥当だろう。集団としての総合力が発揮される。先の志水も、欧米の学校との比較の中で、日本のとりわけしんどい状況の学校が成功した理由に「教職員集団」「集団作り」「集団」の比重の高さを上げる(175-9頁)。

教員各自の経験の総体は違う。多様であるほどいい。それらが全体的に最大限有効活用できる組織運営を図る。それができれば、陰湿なパワハラは生まれにくい。ストレスは弱い者いじめを生む。これは動物世界の常。ストレスを生まないように動物は棲み分けをする。(市街地に出て来る熊は山野の熊を恐れてのこと。)人間の場合は、それぞれの役割をその組織が機能するように果たす。教員は学校の組織を支え、組織活性化のために参画する。相互に依存しつつ、参画する。理想状態である。自浄作用が機能する。本業とは別次元のことで多忙さに拍車をかける

愚を無くす。【私の職場は陰湿さはなかった。陰での悪口は極力避けてきた。本人のいい部分を私なりの印象で語ることで負のスパイラル化を避けた。悪口は共感する人がいなければ消滅する。共感者は悪口を固定化し、増殖させる。「理想の実現」に邁進すれば、非建設的な時間・精力の使い方はありえない。組織判断の基準になる。】

10. 声上げが社会を変える 社会が学校・教員の理解者・応援団の一員になれば、自ずと有権者はそのような投票行動に出る。現在、投票率が低いのは社会の学校や教員の実態理解の低さ、学校や教員への期待の乏しさも一因だろう。学習塾の繁盛は、なけなしの金をかけてでも「勝ち組」の一員になろうとする社会の防衛反応だろう。教育費の家庭負担比の高さは異常である。ソフト、ハードとも社会全体で社会を支えていこうとする公助の思想の未成熟である。社会のインフラはすべて社会的共通資本だが、それが政策化されない。こうして格差は拡大の一方である。学習塾の繁栄は学校の授業の価値を相対的に低下させるばかり。塾にはない学びを学級づくりと対でなく学校が求められる。授業づくりは学級づくり。小学校教諭金森俊郎学級はその一例。鳥山敏子のそれも。【受験塾の講師は何が仕事か。受験に有利な塾生を育てることか。学級づくりに相当する営みはあるのだろうか。塾生はお互いの悩み等を共有し、課題解決に向けて力を合わせて解決するという時空を塾の正規時間の中で持ちうるのだろうか。講師を交えて理解を深め合うのだろうか。私の理解不足。】学校が理想実現のための時空だと社会が認知すれば、学校と教員への理解者・応援団は増加する。文化的・経済的に困難な家庭の子どもが学校で力をつけ、人間的に豊かになれば、理解度は倍増する。困り感を抱えた子どもへの理解と対応はよりの確に深くありたい。教育の力を実感した保護者を増やす。精神疾患のために長期入院教員が増えていることへの危機感も共有されるだろう。教育の力への信頼と尊敬がなければ、精神疾患を意思の弱い、耐性の乏しい教員とみなされかねない。ごく一部の教員による不祥事、性暴力等は、現場のストレス解消を図ることと、人権無視の言動を許さない組織づくりを通して全廃の方向で取り組む。学校は社会の縮図である。同時に理想社会実現のための社会の縮図でありたい。子どもや保護者からの信頼と尊敬が鍵になる。卒業生の発信は大学教育の質保証検証作業公開の一端。母校の学会誌への投稿はその物差し。ゼミ教員との共同作業も同様。【退職後の経験の幅が広がった分、発信の質量もある程度は向上しているはず。経験の総体という観点から、ボランティアのほか、軽作業（草取り、草刈り、剪定等）を通して、多様な職業経験者と共同で作業を体験中。その過程で多くを学んでいる。退職時60/65だった私の学校体験の比率は60/72にまでは低下した。できれば60/100くらいにはしたい。正業に就くまでに20種以上のアルバイトを経験した分の幅はあるだろう。他方、私の小・中学校時代の友人は、9/72。学校歴は年齢を重ねるごとに意味

をなくすとはいえ、分子が大きい分、物事が見えて、かつ実行力が育っていればいいのだが。要領の良さだけが取り柄だと、恥ずかしい。自覚はしていないが、学校の垢がこびり付いているのだろう。学校の匂いも。香りだといいが。自分の体臭は自分にはわからない。お互いに前歴を明かさないのが高齢者同士の関係づくりの基本。本人が語るのは可。ある80代の先輩は、「学校の先生は大嫌い。口先ばかりで、手が動かん。」手厳しい教員批判は、私には学校の匂いがついていないからか。逆に教師臭が鼻につくからの非難か。お互いの本音が出せる時空は面白い。】

11. 日々の修行が人生 「人格の完成をめざし」が1947年教育基本法の初志。最期まで日々の修行を重ね、私の人生を全うしたい。金子文子『何が私をこうさせたか—獄中手記—』（岩波文庫、2017年。底本、春秋社、1931年）。文子ほどの過酷な半生を送った人を、私は知らない。それでも文子は自身への尊敬を忘れなかった。学問への探求心を失わなかった。当時の国家から非合法活動を行ったとの理由で逮捕、投獄。獄中縊死（1903～26）。大日本帝国は文化的社会的な大損失をなした。手記は獄中で書かれたもの。

文子と出会うことは日々の修行の意味と、絶対的的被護感との出会いとなり得る。絶対的的被護感との出会いは人を覚醒させる。私は私を生きる。他の誰でもない、私の人生に責任を持つのは私をおいてほかにない。私を最も大事にするのは私である。そのために私が出会う人びとから貪欲に学ぶ。学芸からもひたすら学ぶ。これほどの矜持を生きた。

「人格の完成をめざし」続けた文子が国家権力の手によって天寿を全うできなかった大日本帝国時代。教育とは国家への義務であった。臣民の3大義務の一つ。兵役も義務。現行の日本国憲法との違いは歴然としている。現行憲法の理想である、主権在民、基本的人権の尊重、戦争放棄の3つの実現は、「根本において教育の力にまつべきものである」と謳う（1947年教育基本法前文）。しつこいが、繰り返す。「人格の完成をめざし」が教育の目的である時代を生きる一人として、例えば、文子に恥ずかしくない日々を送りたい。いわんや、このことを仕事の土台、仕事の最終目標にしている一人として、自身の人生を「人格の完成を目指して」積み重ねたい。他者と自分を比べることははしたないこと。他者から学ぶことは憧れの対象であり、時には他山の石として、である。「対岸の火事」では学べない。他者との較べは無意味である。有害でもある。比較の物差しは一つではない。重さ、長さ、比重等々、国際基準の物差しはある。それ以外はすべて相対的である。小さな宇宙である人間においてはなおさらである。他者より「劣っている」と自己評価・認識した自己を引き受けるのは私しかない。自己更新の参考になる時のみ活用する。さもなくば無視する。自己肯定感が育てば、他者の評価も参考にすることができる。「劣っている」と評価する他者はあな

たのことを安く使う。ただ働きをさせる。支配、服従させる。

肯定感のある人は、非道・不合理な仕打ちに盲従しない。必ず抗う。生物はそのようにできている。文子のように。個体保存の法則である。その法則を守り続けた個体が種の持続の責務を果たす。自然界からの要求への応答である。ここでいう種の持続とは自身が実の親になることだけを指すのではない。あらゆる次世代の親世代として子育て・教育への総がかりの責務の一端を果たすことが種の持続であり、「世界の平和と人類の福祉への貢献」を日々果たすことである。早世を余儀なくされた人びとも個体保存と種の持続の営みに参加している。小学生も自他の生存を保障する生き方を通して種の持続の営みに参加している。

このことが実感できる授業づくりを3人と演習で行った（その一端は3人が本誌で報告済み）。一人ひとりの個はその命の扇の要に位置する。到達点であり、出発点である。そのような最重要事項を実感できる授業を子どもの実態に即して行いたい。子どもの学び方、他者への関わり方が変わることは間違いない。公開授業として実施する機会があれば、多くの感動を生む。感動は現実を変える原動力になる。感動しない人は動かない。心が動くから言動に現れる。心が動けば身体は動く。感動を与え得る者は感動を受ける者である。感動と共にある、感動を共に分かち合う仕事の一つとして、発信することは世直しの樞となる。

12. 私が私を生きる 文子は獄中でその人生を綴った。永山則夫も獄中で夥しいほどの作品を、死刑執行の朝まで生み続けた。厳しい境遇は自らの生を見つめさせる。自己と歴史や社会との関係を掘り下げさせる。

私は卒論ゼミで自己形成史を踏まえた研究主題を選ぶことを勧めてきた。経験の総体を振り返ることは生き直し、学び直しの契機となる。生きて在ること／生きて在ったことを証す。その証は公開するか否かは別として、自分が綴る自分史である。

経験の総体でいえば、生きづらさの経験が相対的に低くなるにつれて肯定感が増す。最初のセーフティネットである義務教育諸学校教員として、肯定感が増すような関わり方を続けたい。個だけではなく集団としての肯定感である。生きづらさを生きていた仲間が肯定感を増す。その仲間の一人であることの肯定感は波及する。逆は断固拒否する。そのためには教員、大人自身が不合理に抗うことを通して証明する。

「自発的隷従」は16世紀フランスのことではない。非道・不合理なことに抗わない人は無意識のうちに「自発的隷従」を生きている。現代の「奴隷制度」でもある。大人や教員がその悪しき見本を示せば、子どもは負の感化を受ける。「反面教師」を超えるには憧れの場合以上の熱量が必要となる。表面的な「反面」では「教師」以前である。なぜ故その人はそのようなことをし

たのか。真相・深層を探る中でしか見えてこない。そこから反面教師を超える日々が始まる。貧しい職場環境は子どもにとつての貧しい学習環境。生き辛さ・働き辛さの下、自発的隷従を生きると、災禍は子どもに及ぶ。これ以上子どもにつけを回す愚は避けたい。【この国が犯した近隣諸国への歴史的加害に眼を瞑り、子や孫たちに責任を負わせてはならないと喧伝した人物がいた。民事上は別として、負の遺産は相続放棄できない。すべきではない。より大きな負の遺産を生み出す。現職時代に私は私なりに声を上げ、要求してきた。また、現場の条件の不十分さを批判しつつ、その中での優れた実践を紹介し、また、学生の学びの姿を報告してきた。現在も継続中である。現在、しがらみから解放された分、応答する身体を最も自然に生きているのだろう。告白めくが、退職後数年間夢に出たのが大学入試関係の業務。ミスがあれば新聞沙汰。受験生減を招きかねない。精神的圧迫は並ではなかった。お陰で耐性は少しは身に付いたが、ストレスだったのだろう。大学卒業後しばらくは、単位不足で卒業できないという夢を見た。必須単位等、何度も確認していたにもかかわらず。実際には190単位近く取得。学校体験の分子が多い分、関連事項が夢になるのか。】

13. 同業者三浦綾子 三浦綾子は教員時代には直接出会う多くの子どもの育て、励ました。子どもの背後にいる保護者、関係者をも励ました。結果として戦争に加担した自己と向き合い、のたうち回る思いから教員を辞した。辞した後は作家活動を続け、間接的に多くの人を育て、励ました。莫大な作品群は今なお綾子を生き、その営みを続けている。

教員は綾子と同じ。生涯担任ならば、直接出会う子どもは最大35人の勤務年数分。子どもの背後の人びとを含めると、倍々倍々、、、文書が残れば、間接的な励ましも多々。今回の投稿はその一つ。

14. 不在・非在の存在 木下順二「夕鶴」を演じ続けた俳優山本安英は喝破する。自分は舞台の前のお客さんだけでなく、劇場の外の人びとをも意識して演じていた、そうでないと、いいお芝居はできない、などと。『女優という仕事』（岩波新書、1992年）。不在の他者への関心である。【いつの頃からか、私は教室に臨む時に思念する。生身の学生はむろん、かつて出会った人々、これまでの私も含めて時空を共にするという感覚である。500人定員の大講義室の場合は、前後と両側ともにぎっしりと人。水俣病フォーラムの写真展で出会った患者たち500人だったか、一人ひとりの生前の足跡を読みながらその遺影に直面する。重く深い迫力。その残像。周南市回天記念館で出会った130人だったか、の遺影、、、不在の他者から見守られているという感覚。死者からの被護感でもある。負の遺産を生むな、との仮託感でもある。無様はご法度。誤魔化しは入る余地はない。「英霊に対する尊崇の念を強調する人はどうなのだろう。】

【おまけ山口県上関町に原発の核のゴミ中間貯蔵施設建設のことが降ってわいた。核廃棄物が無化するには10万年は要する。町は降ってわいた話に賛否両論。

その話が出てすぐに、実際にことを確かめたいと、神様をお願いした子どもがいた。でも、それを確かめるには100歳まで生きて、そしてまた、100歳まで生きて、それを1000回繰り返すことになる、と神様。神様も1歳にもならない子どもに説明するのは苦手の様子。「よくわかんないけど、100歳って、どれくらいなの？」「お母さんのお腹の中にいた時間の120倍。分かるかなあ？」「うーん」（120倍がどれだけなのか、ぼくにはそうどうもできません。うまれたときはあつかつたけど、いまはまださむい。また、あつくなったら1ねんのたんじょうび、だって。おなかのなかにあって、どれだけいたのか、わからないんだもの。わからないことばかり。でも、わかるってどんなこと？ ぼくがこんなことをかみさまにおねがしたことなんて、おとうさん、おかあさん、わかっているのかな？）—新聞報道を前に、創作意欲がわく。佐野洋子『百万回生きたねこ』の借用。未完。はて、その子は願い通りに1000回まで生きて見届けることができたのだろうか。10万年。個人の肉体で体験できないことはよくよく考えてから。7代後のことを考えて事を決めるアメリカ先住民の教えは、いかなる経験の総体の中から生まれてきたのか。その過程を做うことなくしては、学べないのだろう。】

資料 3. 個人報告への応答（2023.10.17 / 12.14）

3人とも暮らしを大事にしつつ、天職を実践中。意識の高さは課題発見の鍵。綴りは自己対象化の度合いが高まる。個人レポート作成の意義は大きい。三石報告は別途投稿の個人報告の中で応答してきた。他の二人には既にメモして返送した。今回の文字化は最小限とする。

（1）上田報告への応答：メモは23項目。生の思い、願いを遠慮せずに発信する。家事、育児、仕事の全てを大事にしたいという、真っ当な願いが満たされない社会は異常な世界。ここが社会全体で共有されるためにも発信を。／学級の保護者に発信したいことは、子どもと保護者にとっての宝。保護者会等で伝えてみたい。応援団が生まれる可能性もある。／その点でも飲食店での3日間の中堅研修。アルバイト体験者なら繰り返し。多様な世界の体験をという趣旨とはいえ、教員が切望する教材研究の3日間ではない。飲食店関係者にその切なる思いを語る機会はないのだろうか。／自らの誇りにかけて心無い担任への意見表明。子どもは先に行く。学び合い、育ち合う喜びを共有する、そのための環境整備が喫緊の政治と行政の仕事。／原点回帰を踏まえて、現状の中で最善・最大のことをめざす。早晚、現状の枠はさらに広がっていく。今回の発信がそれ。

（2）桑野報告への応答：メモは21項目。経験の総体の中で自分の中で血肉化されたものが自然に強みとなる。それが伝わるものとなる。無際限の仕事ではあるが、「それが子どもの力になっているという手応えはないのか」。／年下同僚の見解。こなす感じの授業だったなら当然。超えたい。誠実な授業であれば栄養になっている。

毎回ご馳走ばかりではない。日常の食が栄養となる。／いろんな助言。それぞれに意味がある。それらが全体の中でどう位置付くかが問題。そのための全員参加の協議へ。問題の本質が構造的に浮かび上がり、実践的な対策案も生まれよう。全体図を知る者がその任に就く。／ごく「フツー」の女性の、教員の、子持ちの、、、がごく「フツー」の健文権（憲法25条）を保障する。そのための行動へ。／神奈川県大磯町議会。議員は20年以上も前から男女同数。「当たり前だから」と。自分達の望む方向に変えていく、私の町は私が変える、コミュニティ作りが上手だという。議員が男女同数になれば、世界は変わる。

（3）三石報告への応答：メモは口頭。分析の通り、「時間のなさ」「人手不足」。すべては総がかりの子育て・教育の文化を持つかどうか。これが「当たり前」になるかどうかにかかっている。子育て・教育の文化が豊かであれば、社会は豊かで優しくなる。そのための声上げと専門家としての実践を積み上げ、発信する。学校内に限定せずに、学校と教育の理解者・応援団を増やす取り組みを続ける。／資料3は今回（12.14）一読。噂話ではなく、現場の実態、その背景、可能な処方箋等が展開されている。オープンダイアログ。対話の醍醐味。話題に上った人々も座談会に参加してほしいほど。本人も救われる。子どもも同じく。対話の機会があれば、憧れの対象として別の話題の提供者になるのだろう。ここでも 総がかりの子育て・教育の文化の創出が解決の決め手になる。／別途投稿中の三石会員の個人報告はその第一歩。経験の総体が持つ意味を体現された。「この世界の片隅で」（山代巴）「人間の尊厳」を賭して生きている人びと、とりわけ若い人びとへの連帯表明となるだろう。

おわりに

小文は新たな始まりを刻む記念となるだろう。卒業生会員の誌投稿が日常化すれば、本会は活性化する。同窓生を加えた社会的発信の輪が広がる。新たな時代を共に創り出すべく「老兵」の出番である。（退職者は40名超か。共に年齢を重ねた成熟の姿を示したい。なお、投稿に際しては学会費納入が必要となっている。念のため）。

付記：小文誕生のいきさつは既述した。二人とは近況報告を交わしており、状況の一端は掴めていた。作品の一部になるようにとの思いから近況報告に気づきを記して、複写を送付。そのうちの一人は実践記録を本学会誌に投稿した（続編も予定されていたものの、完成度に拘ったのか、原稿は仮眠中）。3人目の私信への返答も同じ趣向。と、叩き台が送付されてきた。かくして総頁20頁超の大作となった。文字起こしの労を担った三石とはお互いの家で原稿を練った。3食手作りでもてなした家人の言。「あなた

のは、趣味ですね」。時間をかけて卒業生の原稿を読み、やり取りする。私信への応答に関しても同様。編集者は作家の作品を世に出す仕事。協働作業である。商品価値のある仕事。片や学会誌。内輪のそれ。本来ならば約1200人の卒業生会員と、学生会員約600名。学外の学会誌相互交換機関は300余か。これは未確認。総計2100部。驚嘆すべき数に向けての発信。一定数の目に留まり、それなりの反響があるはず。だが、現実には、ない。私まで届いていないのかもしれない。これほど生産性・コスパの低い活動をなぜ故に。家族には趣味と映る。同じ作業。現職時代は実益。めざすところは変わらない。趣味のお陰で世界が広がる。インベカワリ★『私の顔は誰も知らない』（人々舎、2022年）はその一冊。その帯は言う。「なぜ多くの女性は、これほどまで偽りの姿で生きているのだろうか。抑圧、世間体、感情労働、そしてジェンダーとフェミニズム。うまく適応しているように見えるけれど、本当はしていないし、するつもりもない。たぶん理解されないから言わないだけ。そんな私たちの肖像。」インベは言う。「私が扱っているテーマは「女」である前に、「人間」で、主軸にあるのは「私」は何を考えた、「私」になるのか、ということだ」（127頁）。被写体となる女性は、全てを受容する著者の姿勢ゆえに最も表現したい自分を晒す。そのお陰で読者である私はそのおこぼれを頂戴している感覚である。著者は彼女たちに肉薄する／できる。私は写真の上、文字の上で出会う。男性による写真集とは異なる。私には見えていなかった女性の一端が垣間見える。 小文の3人は著者より10歳若いとはいえ、インベとは同時代の空気を吸って生きてきた。擬態・擬制を生きてきたのだろうか。非対称の男性も自らが創作した擬態・擬制を生きてきた。この国における女性の生き辛さとは別の意味での男性のそれでもあろう。しかし、両者は非対称である分、根底部分では繋がっているながら共通の解決対象とはならない。趣味でこの現実が少しでも動けばのっけもん。インベ作品に関心が向くのも因縁か。著者と同じだったのは仕事への向き合い方。42歳時の著者の「幸福段階仮説」「1 好奇心第一で仕事をし 2 その仕事の結果的に社会の役に立ち 3 お金が後からついてくる」（360頁）。私はいつからか、この感覚を生きるようになった。最初の職場では短大生から仕事の他に趣味はないのか、と不思議がられた。趣味と実益が同じと応答したが、納得は得られず。だが、これは本音である。教員としての役割自己に自己を留める気は皆無。教員の仕事を深く広く展開するには、人間的な本来的自己を徹底して生きることが大事という認識だった。それでも力量不足ゆえに時間と精力の大半を教員の仕事に投入した。それが仕事人間に映ったとすれば、当然。学生への責任感ゆえのこと。上司の休講を代講し続けたのもその一環。高い山は裾野が広い。学生に低い山では無礼千万。子ども時代

に砂場で実感したことが仕事で生きた。結果的に生涯のほとんどを学校空間で過ごしたことが裾野の広さとなったのだろうか。退職後は他の世界を経験中である。

渡邊隆信『森のような教師』（共和国、2023年）には、「デパートメントの経営者」ではなく、「森のような教師」でありたい、と野村芳兵衛の言が紹介されている（17頁）。同感である。かつて引き出しの多い教員に、と年上の同僚教員が学生に強調していた。天邪鬼の私には、例によって「然りと否」と私見を述べた。引き出しは多様な経験が生む。経験を通して、教員の身体を潜っているから自在に活用できる。そうでない引き出しは却って不自由ではないか。目指すべきは単なる物識りではなく、賢さ。多種多様な知見が融合され、立体化している様、と。渡邊は他方で「危険な職業」として、ある校長の手による一文を紹介する。「教師は持ち前の知識でその日その日を送ることのできる危険な職業です」と（130-1頁）。経験の質量は年齢とともに増大する。担当する子どもは学齢期のそれ。知識差が広がるばかり。知識は生活にどう生かされるか。実年齢分の知見をどう実践しているか。この自問を欠くと、文字通り「危険な職業」となる。「裸の王様」に堕しかねない空恐ろしい職業である。救いは真実を告げる子どもの存在である。醜態をさらさないためにも真実を語る子どもを育て得るかだろうか。（23.11.20）

補記：AIは情報のデパートメントである。膨大な情報を人間の難問解決のためにいかに活用するか／活用しうるか。手がかりが読解力。新井紀子『AIに負けない子どもを育てるー21st Century Childrenー』（東洋経済新報社、2019年）は、AIが苦手とする読解力をいかに身につけるかを、「基礎的・汎用的読解力」を判定するリーディングスキルテスト（RST）の開発と実証研究を踏まえて示す。「人間がコンピューターと本質的に異なり、そして優れている点は、『意味が（なぜか）分かること』と『欲求があること』と『全力で怠けようとする』というところではないか」（192頁）。ここを踏まえた読解力を育むべく提言を為す（280-293頁）。幼児期から小学校卒業時点までに配慮すべき諸点である。文科省「幼稚園教育要領」、厚労省「保育所保育指針」、文科省「学習指導要領」等との比較検討を行う価値がある。

なお、本書には観点別RSTが6分野28問掲載されている。私は41/70点。この程度の読解力だった、と愕然とした。本が正確に読めているのだろうか。私の認めた文章の完成度はいかに。推敲を重ねたい。それでも表現したいことがあるのは社会的動物としての証か。読解力を高めることは全ての職種・日常生活で必須である。著者が分類する「中学生平均レベル」では教員の場合、「知識伝達型の授業しかできないことが懸念されます。（中略）様々なことに興味・関心を持ち、高度な質問をしてくる生徒や、批評精

神に富んだ生徒に対して、「読解力が低い」教員が「手に余る」と感じると、そのような生徒の可能性の芽を摘むことにもつながりかねません」（102-103頁）。未読ならば挑戦してほしい。読解力を高めるヒントもある。（2023.11.21）。

追記：開架式図書棚から本が呼ぶ。インベカマリ★『家族不適応殺一新幹線無差別殺傷犯、小島一郎の実像一』（KADOKAWA、2021年）。インベの著書では初めての出会い。著者の徹底した受容の対象理解が生む世界である。新聞のベタ記事を越えて、事件の不可解さを解明して社会に届けてくれた。小島の一連の一見、不可解な行動の動機が意外にも「普遍的な人間の心」であることに納得した。著者が小島に対して「人と人として対等に接している」（290頁）ことから得られた世界だろう。確かに「個人を掘り下げるとは、社会を見ることに繋がると思っている」（291頁）。做すべき他者への関わりの基本的姿勢だろう。いかなる言動であれ、私と地続きであるという真理の再確認となった。写真集（『やっば月帰るわ、私』赤々社、2013年）でも著者の姿勢は一貫している。他者があるのままを示す時空とは安全・安心が保障されているそれである。相互理解の地平となる。（2023.11.28.）

蛇足：3人の発信を「幻」にするわけにもいかず、かといって3人だけに任せて離脱・逃亡では、あの「厳しい声」が飛んでくる。既視感効果か、今回ほど手間暇かけたことはない。質はともかく、量で3人にはお許しを乞う。量は質に転化する。（2023.12.20）

蛇足の蛇足：本来ならば、4人の共著となる予定だったが、規定の頁を超えたため分割とした。分かれても、繋がりは切れない。編集委員会には無用の手を煩わせた。合冊の途はないのだろうか。（2024.1.10）

付録：本学会研究大会（2023.10.27）参加報告資料。小村瑞与報告と応答（2023.10.31／11.29）
0. 私からの贈りもの 小文は、標記研究大会分科会1の広島市立小学校校長小村瑞与会員報告への応答を兼ねた概要である。宝の独り占めはご法度。佳き学びは共有し上げたい。理想は当日の質問カードへの応答を含めた報告者自身による文章化だが、本年4月から校長職にあって多忙である。会場に参加能わなかった会員の願望が叶わないこともあるかもしれない。最悪を防ぐための対応である。参加者の一人である私からの贈り物でもある。【かつて本学科創設30周年を記念して、通常の研究大会より多い報告の場を設定した。例年以上の参加者を得て盛会となった。各分科会の運営担当者として、私も簡単な報告を綴った（『広島文教教育』）。この形式が学会報告の基本形となることを願ったが、一回限り。学会情報に関する現状は簡素すぎる。学会の記録としての価値を高めるためにも各報告について100字程度の概要報告が欲しい。私は小村報告の案内を見て即参加決定。2015年退職後、初。卒業生を誘った。家族での参加。別途、所感

を綴られるはず。】／1. 変わらない 15年ぶりか。人となりの原型は年齢を重ねても変わらない。進化は深まり。変化ではない。私の中の記憶は20年前のそれと、15年前のそれと。前者は学生。後者は報告者。いつも時務への応答姿勢が変わらないから、変わらないと感じさせるのだろう。逃げない、妥協しない、諦めない、改善に努める、それゆえ深刻にならない。生き方に学びたい。はて、私はどうなのだろう。／2. 小村報告概要（1）「すきとおったほんとうのたべもの」：これが報告に流れる通奏低音であった。それはまた、報告者自身の生きかたなのだろう。リアルな食と、文化としての食。これらは日々の暮らしの一部であり、各自の総体としての身体を創る。共に本当の食べ物かどうか。常に吟味したいと思わせ続けた問いかけであった。／（2）社会人入学生としての学生時代：「カルカッタの会」の立ち上げ。マザー・テレサへの若者の思いに対する回答。カルカッタは足元の問題と繋がっている。今、ここで、この私ができることを為す。誠実に。「大学に行くこと、学びが楽しくて仕方がない」、との思い。意思の高さと強さと。若い仲間との間での化学反応の手応えゆえだろう。周辺のカルカッタ。その時期を共有できた教員の一人として、社会人学生効果を実感。教員として社会人学生への責任感には私自身が鍛えた。／（3）教諭時代：柱は3本。「①考える授業、②居場所づくり、③今、それでよいか。」私がかつて教諭時代の小村報告で感銘を受けたことが朝の健康観察。心身の健康状態を自己開示する。仲間を知ってほしい。受け止めてもらえ実感があるからこそ。また、そのような学級づくりの成果と発展形である。また、課題を抱えた家庭の児童と足しげく通うことで少しづつ信頼関係を築き、子どもの成長へと繋ぐ。緘黙児への丁寧な関わりの事例。子どもたちが発する「悪口」をひたすら板書し続ける。子どもに自己直視を迫る。これらは教員時代の実践のごくごく一部だろう。連続講演であれば、いくらでも「すきとおったほんとうのたべもの」と出会えるはず。4月校長就任以後、卒業生と保護者が校長室に足を運んでくるという。これが3本の柱を生き続けた何よりの成果の証。現任校の子どもと保護者はその姿を見て、むべなるかな、と快哉を叫ぶだろう。／（4）「ブラックか？」：校長室への来訪は一朝一夕に生まれたのではない。その意味では学校、教育の本質としての成果は即座には出ない。それが時として虚しさとなる、と。費用対効果の出ないものゆえ、と。多くの課題はあるが手応えは多々。それでも、「ブラックか？」と問う。／（5）「幸せになる力」を育む教育をめざして：この目的・目標実現に向けての日々。手応えの数々が写真（10数葉だったか）で表現された。その中から代表的なものを一葉。雲が手の指のように見えた、と女子児童。ピルを背景に女兒の掌と手のような雲とのショット。感激を共有したいと思わせる校長が在ることの児童たちの幸せ。それぞれの写真にはどんなドラマがあるのか。想像を巡らしたくなる。空地の草刈り作業。コスモスを一輪だけ残す、作業員の心映えに感銘した体験。最後に「校長は楽しい」、と結ぶ。賢治と重なる。／3. 疑問など質疑応答の時間はなく、各自感想カードに記入。報告概要と絡めて私の応答は記した。全てが共感とはい

え、その上での疑問。教育の醍醐味があることは承知の上で言う。そうであっても、多くの教員にとっては教員の生命線である教材研究の時間が十分に取れないほどの過酷な職場であることは事実である。やはり「ブラック」と言わざるを得ない。「ブラック」の解消・改善を現場の篤農的な営為に丸投げするかのような政治と行政は本来の仕事をするべきだろう。政治や行政が為すべきは、あらゆる社会的共通資本が本来の機能を果たすための専門的な仕事である。「ブラック」状態を速やかに改善することは最優先課題である。教員もこれまで以上に現場の声を発信しつつ、専門家としての仕事を続けたい。学びの成果の公開であり、学びのさらなる向上へ向けて政治や行政を動かすための社会的発信である。／学びの証は変わる。林竹二の至言。子どもや保護者からも同様の声が発せられてこそ、学びが本物であることの証となる。学校空間から飛び出さない学びとは何だろう。自戒を込めて記す。／私の場合。費用対効果が現れにくいと思ったことはない。学生のレポートが少し深まった、壁にぶつかりもがいている、それらはすべて、私にとっては学生における学びの成果。教員としてどこまでその力を育むうえで役に立てたかは不明であっても、その場に立ち会えたことが手応えを感じた学びの成果であった。むろん、教授の現役合格格わらずとも、幾度となく挑戦する姿もその一つ。そうした地道な成果を間近に見ているから本学教育への信頼が生まれ、長期的な視点と中短期的視点とで捉える発想が生まれたからだろう。実際小村報告で手応えありの写真を10枚以上紹介されたのはその表れ。／疑問。ブータンの国民幸福度指標にあるように「幸せ」感は様々。賢治に倣って言えば「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」。「ほんとうのたべもの」は、ひとり独占するものでもなく、孤立して味わうものでもなく、分かち合うもの、願ち合う、天と共に願ち喰らうもの。であれば、「幸せ」とは自他の幸せの意である。自他の幸せは均等か。順位は同時か。難問を投げかけられた。学校や教育、社会の諸問題は構造的な問題である。個別の部分でいくら努力しても限界がある。システムの問題だからである（苦野一徳『「学校」をつくり直す』河出新書、2019年）。校長職にあった工藤勇一はシステムを変え続ける（工藤勇一・鴻上尚史『学校ってなんだ！—日本の教育はなぜ息苦しいのか—』講談社現代新書、2021年）。工藤校長流「学校経営の極意」（81頁図）は明快である。世界がめざす目標として、個人の well-being と社会の well-being が両立する世界。それを実現するために必要な能力として、自律・対話・創造の3分野9つのスキル、実現するための具体的手段を対話を通して進める。ここではすべてが教育の最上位の目的の実現のために有機的に繋がっている。逆にシステムが機能不全を起こしていれば、子ども、教師、保護者、社会が生き辛いの当然である。構造的な改革から「ブラック」を変える指針を先見的な工藤の実践から学びたい。／4. 問いは私に戻って来る (1) ブーメラン効果：小村実践が優れている分、同業者としての自らを振り返る契機となる。現職を終えた身としては、実践の振り返りを余儀なくされる。いくら高邁な見解であっても、わが身に突き刺さらない問題は意味のない問題である。当事

者性を自覚させることが人を目覚めさせる。／私が落ちて着いて聴講できたのは、不十分とはいえ、自らの実践報告を公開してきたからである。怠惰な身を熱量ある報告の時空に置くことは辛い。誤魔化しを生きさせたトップの演説等は気力が低下する。対照的に誠実な生き方は人を鼓舞する。応答する身体の実感である。／校種は違えど同じ業界。それぞれの現場で何業を為すか。為してきたか。これを対象化する作業を自らに課す。ここに現場に立つあらゆる者の矜持がある。後なる者の成長を喜ぶだけの好々爺の次元は半世紀前のこと。同業者は共に課題解決経に向けてそれぞれの足場で為すべきことをする。「周辺のカルカッタ」の自覚に基づく取り組みである。小村報告が私を鼓舞する。／(2) 足元の現場：私の最初の職場の短大生が現場の人の話が聞きたい、という。然り、否。保育現場をめざす者にとっては同業者の実践は垂涎的だろう。生きたロールモデルになる。同時に大学の教員も現場を生きている。学びの質量が最も高まるのはどのような条件・状態の時か。これを検証する。学生自身も現場に身を置いている。当事者同士である。保育現場のことが話題になるとはいえ、講師による理解と評価を通してのそれである。他方、大学授業では自らが学びと評価の主体となり得る。活用しない手はない。お客さんでは、見える世界は半分以下。自覚的な消費者には生産現場も見るとはいえ、多くの消費者は知らず知らずのうちに「健康を蝕む」製品を消費する「有難い人々」に堕しかねない。本来、購買を通して世界の仕組みを変える力を消費者は持っている。製品・商品は売れなければ廃棄処分である。だが、その立場に気づかせないようにするのも狡い企業の計算。自覚的な学生になり続けることで同業者の実践に対してもより鋭い視点で向き合える。経済的貧困ゆえジャンクフードを余儀なくされる、その構造を問いたい。実践の鍵は日々の学生生活、授業の中にある。主体的自覚的な学生・教員であることが始まり。／こんな見解を述べた。今も同様である。現場人としての視点を持ち続けたことの結果。退職後の現在も同様である。講演を聴けば、応答の一環として質問する。質問が出せなくなった時点が私の潮時。老兵として消える。先の、現場の話が聞きたいとレポートに思いを吐露した学生は主体的で自覚的な学生であった。それほど大学の授業は浮世離れしていたのだろう。足元の現場を疎かにする社会は崩壊する。政界、財界、学界、教育界等々、例外はない。／(3) 日々の食と文化：現下の状況は虫や獣、植物の力も借りたいくらいの危機的状況。世界全体が幸せとは言えない現状で、「理想の実現は根本において教育の力にまつべきものである」という、教育の力への信頼、希望は増す。危機的状況が続く中、これまでの文化の営為が問われ続けている。90億人の一人である「私」のそれが。生き物として日々、食を得る。文化的存在として日々、文化としての食を摂る。いずれも、危機的状況に陥った時にそれらが自ら・他者を支えていることが実感できた時に「すきとおったほんとうのたべもの」であったことに気づく。残念ながら。／(4) 卒業生の発信：在職時代の仕事の意味の確認。卒業生の生活・仕事のごく一端が手掛かりになる。その一つが本誌への投稿。笛吹けど踊らずでは寂しい。ハーメルンの笛では本末転

倒。自らが吹き、自らが踊る。そういえば安倍首相（当時）の無理筋の最たるものの一つ、検察庁法改正案に反対し、提出断念に追い込んだのは、笛美さんであった（『ぜんぶ運命だったんかい』（亜紀書房、2021年））。時代を前に進めた言い出しっぺ。私も背中を押された。卒業生の発信はより強力で背中を押してくる。／5. 運営上の課題 それほど深い、緊急性のある報告であった。生の質疑応答があればさらに活性化しただろう。10分あれば3人は質問できる。一期一会。それが最後の出会いである可能性を自覚するから出会いを大事にする。犯罪被害者等への支援活動に関わる中でより痛感する。／無用な無駄な1分は参加者全員分の無駄な時間。118回の虚偽答弁に要した空前絶後の汚点。1億3000万人分の空費・浪費か。他山の石の代表的なもの。しつこいが、記しておきたい。国民総健忘症による国家・社会崩壊という大惨事発生防止のためである。／余談。数少ない私の講演の機会。講師紹介は遠慮してきた。レジユメに簡単な来歴を記せば済む。大事なはその日の話の中身。主催者には話の内容に関する質問等を期待した。／6. 解決策 抜本的には開始時刻を13時とすれば解決する。30分増。週休2日制の現在、現職者の参加を見込んだ時間配慮は不要。前例踏襲の悪例。頭が固いことを「脳味噌が筋肉」というらしい。改善することに躊躇は厳禁。果敢に改善を。会場全体で学びの深化と共有が可能となる。折角の対面形式。時間の有効活用を工夫したい。／資料の配布は欠かせない。報告の骨子、内容の概要を印刷配布すれば、理解を深めてさらに学び合いが生まれる。（ゼミ生の報告に際しては、参加者への礼儀としてやや詳しいレジユメを用意するように求めた。学びの時空作りである。参加者は資料を見な

がら、耳でも情報を仕入れる。平素の授業の通り。限られた時間の最大有効活用策。結果的に本誌への報告作成は難なくできた。）なお、内緒の話だが、大会案内を見て、即、職場に手紙を届けた。当日お目文字した際に、手紙への回答を話します、とのこと。2点は回答無しだったような。／追記（2023.12.4）小村報告に導かれて畑山博『教師宮沢賢治のしごと』（小学館、1992年）を久々に読む。初読時、卒業生たちが60年以上たっても賢治先生のことを授業も含めて鮮明に記憶していることに圧倒された。賢治の「生徒諸君に寄せる」（下書き稿）の一文。「この四ヶ年が／わたくしにどんなに楽しかったか／わたくしは毎日を／鳥のように教室でうたってくらし／誓って言ふが／わたくしはこの仕事で／疲れをおぼえたことはない」形式に囚われない、学芸・科学に根差した実践、身体全体での応答、生徒への関わり等、做うことは多々。「誰か生徒に向き合うとき、（略）常に賢治は、今日の前にいる生徒を、今日の前に見える姿ではなく、相手がかくあるはずだという理想の形に置き変えて話していた」（166頁）。「頭で覚えず、いつでも身体で覚えなさい。すると知識に感動できるのですよ。（略）ただ感動せよ、と言われましたね」（瀬川哲男）（168頁）。／教師の仕事への新たな覚醒も。自らの身体の応答に誠実であること。これを大事にすればいいと思えたのは最大の収穫であった。次元の高いところから教師の仕事を捉えることで精神的な余裕が生まれる。「生徒諸君に寄せる」の末尾。「誰が誰よりどうだとか／誰の仕事がどうしたかとか／そんなことを言ってるひまがあるのか／さあわれらは一つになって（以下発見されず）」賢治から託された宿題。